

# J-CEF NEWS

no.1

2013 AUTUMN

リレーエッセイ

「市民の歴史」を編む

／川中大輔（シチズンシップ共育企画代表）

実践事例紹介

兵庫県立兵庫高等学校「創造基礎」の取り組み

／大前吉史（兵庫県立兵庫高等学校教諭）

書評

「社会を変えるには」 小熊英二著

／水山光春（京都教育大学教育学部教授）

特集

「シチズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」

／小玉重夫（東京大学大学院教育学研究科教授）・若槻健（関西大学文学部准教授）



## 「市民の歴史」を編む

シチズンシップ共育企画  
代表 川中大輔

「今日はなんの日ですか？」と尋ねられたら、みなさんはどう答えられますか。日本記念日協会のウェブサイトを見ると、その日が「なんの日」なのかを知ることができます。しかし、「市民にとって意味のある日」を私たちはどれほど伝えることができるでしょうか。

小田実・鶴見俊輔・吉川勇一が編者となってまとめた本に『市民の暦』（朝日新聞社、1973年）があります。「国家のがわから押しつけられる暦ではなく、市民が自分の手でつくりだしてゆく、市民の暦を編んでみよう」（前掲書「まえがき」）との思いから、この本には一年366日、全ての日に「市民にとって意味のある日」が2～5項目ずつ、記述されています。例えば、11月28日は水俣病患者ら一株株主がチッソ株主総会に出席した日、6月10日は東大セツルメント・ハウスが本所に開設された日、3月5日は無着生恭編『山びこ学校』が出版された日

であることが分かります。

「市民にとって意味のある日」。それは上記のような社会問題に挑んだ市民の歴史だけではありません。問題ある社会システムに弄ばれた市民の歴史もあり、また、同時にそうした社会システムに加担した市民の歴史も含まれるものです。こうした複合的な「市民の歴史」を学ぶことは、過去から現在への教訓を得たり、過去からつながっている現在の諸事象への理解を確かなものにしたりします。

今夏、私は京都の在日コリアン集住地域でフィールドワークを行いました。その中で在日コリアンを排除してきた日本社会の歴史と、その排除に抗してきた闘いの歴史に耳を傾けました。当事者の語りから自らがいかに無知であり、その無知故に様々な情報を十分に吟味できていなかったことを反省させられました。この経験は「市民の歴史」の必要性を強く痛感させられ

るものでした。

ヴァイツゼッカーは『荒れ野の40年』（岩波書店、1986年）の中で、旧約聖書の記事を参照しながら、私たちが様々な経験を心に刻み続けられる一つの区切り目を40年と述べています。今から40年前の日本社会は、新しい社会運動の草創期。折しも『市民の暦』が発刊された年です。そうした運動の歴史から私たちは何を学び、心に刻み続けていくことが求められているでしょうか。

区切り目の一つを迎えているとも言える今、私たちには過去に学ぶ機会を設け、また各地で「市民の歴史」を記録し、繋ぎ合わせ、編み続けていくことが求められています。そのようにして、シチズンシップ教育の歴史資産を積み重ねていきたいものです。

川中大輔 (kwnk@nifty.com)

## 兵庫県立兵庫高等学校「創造基礎」の取り組み

～授業の枠を越え、地域で活動する生徒たち～



兵庫県立兵庫高等学校  
教諭 大前 吉史

### はじめに

J-CEF ニュースレター第1号の「実践事例紹介」では、兵庫県立兵庫高等学校の学校設定科目「創造基礎」で取り組まれた「地域課題とその解決のための研究」を取り上げます。「創造基礎」は2010年に兵庫高等学校に設置された「学校設定科目」で、生徒は1年間かけて社会科学と自然科学の2つの異なる分野の研究に取り組みます。

生徒が地域課題解決の担い手として活動している本事例の成果と今後の展望について、授業の担当者である大前吉史先生からお話を伺いました。これからシティズンシップ教育の実践に取

り組もうと考えている方や、すでに実践されている方にとってのヒントになればと思います。

### 1) 「創造基礎」とは

#### 「創造基礎」の目的、位置づけ

兵庫高等学校では、2010年に「未来をつくるトップリーダーを育成する」ことを目指した「総合科学類型」が設置されました。「総合科学類型」では、「正解のない問題に対応する力」の習得を目指し、(1)自ら考える力(2)課題を解決するために必要な能力(3)主体的に学習に取り組む態度、の3つを柱としたカリキュラムが組み立て

ます。

「創造基礎」は、「総合科学類型」の設置時に新設された学校設定教科「創造」の科目のひとつです。総合科学類型の1年生全員(40名)が履修し、年度の前半では社会科学分野、後半では自然科学分野の共同研究にそれぞれ取り組みます。これらの学習を通じて、自ら主体的に学ぶ力を育成することを目標としています。なお、兵庫高等学校は文部科学省の教育課程特例校の指定を受けており、「創造基礎」を履修することによって、必修科目「現代社会」を代替できる仕組みになっています。このことにより2013年度からは「創造基礎」の単位数を4単位とし、授業時間を確保しています。

### 「長田のまちの未来を創造しよう！」

ここでは、「創造基礎」の取り組みの中でも、地域課題とその解決のための研究活動とその後の生徒の様子を紹介します。研究活動全体には「長田のまちの未来を創造しよう！」というテーマが設定されており、大きく分けると次の5つのステップとその後の自主的実践活動で構成されています(詳細は〈表1〉を参照)。

(表1)「長田のまちの未来を創造しよう！」の流れ(平成25年度の例)

月	日	内容
4	16	・グループ決定 科目ガイダンス
	23	・神戸市長田区役所まちづくり課の職員の方による授業「長田のまちの未来を創造しよう」 長田区の抱える地域課題(少子高齢化、多文化共生、中心市街地活性化、震災復興、環境問題、コミュニティ等)について学ぶ
	30	・グループ討議、研究テーマ提出
5	7	・調べ学習、課題設定
	14	・フィールドワーク(6・7限) 受入先:神戸市役所、長田区役所、商店街の振興組合、地域活性化に取り組むNPOほか
	21	・フィールドワークのまとめ
6	4	・課題解決のためのワークショップ
	11	・学習のまとめ 発表準備
	18	・学習のまとめ 発表準備
	25	・中間発表会(6・7限)
7	12	・外部講師による特別授業「これからの兵庫の話をしよう」 兵庫県ビジョン課の職員の方を招き、少子高齢化にまつわる話を中心にこれからの兵庫の課題を考え、解決の糸口を探る
9	17	・研究発表会 行政職員、地域NPOメンバー等を招き政策提言を実施 ※この日以降は課外でのボランティア活動等に参加。

実践事例紹介：兵庫県立兵庫高等学校「創造基礎」の取り組み

1. まちづくりを担当する行政職員による講義を通じて地域課題の現状について学ぶ
2. グループで討議して共同研究テーマを決定する
3. 研究テーマに関連する現場でフィールドワークを行う
4. 地域課題の解決策を考える
5. 解決策を発表し、行政職員や地域住民からのフィードバックを受ける  
→地域での課題解決のための実践活動へ

行政職員からの講義では「全国平均に比べて高齢化が深刻で、祭りの担い手も高齢化している」「若者がまちに

出て来ない」といった長田区の現状が、具体的な数字とともに紹介されます。その後生徒たちは、グループ討議を通して研究テーマを決定していきます（2013年度は「まちの活性化」「多文化共生」「観光」といったテーマがあたりました〈表2〉）。

フィールドワークでは、各々の研究テーマに合った人・場所・団体を生徒たち自身で選び、アポも取って訪問します。そして、インタビューやまち歩きなどの体験を通じて得られた気づきを手がかりに探究を進め、研究テーマに関する地域課題の解決策を練り上げ、行政職員や地域住民に提案します。



(写真1) グループ討議の様子

授業時間の枠を超えて地域で活動する生徒たち

授業の流れは上記のとおりですが、「創造基礎」を受講した多くの生徒たちは、授業外の時間を使って地域活動に参加しています(表3)。授業内のフィールドワーク先での出会いが、生徒の自主的な活動につながっています。

(表2) 生徒の取り組んだ共同研究テーマ一覧 (2013年度の例)

班	研究テーマ
1班	「安心・安全なまちづくり～意識から変えていく犯罪～」
2班	「長田のまちの活性化～長田神社前商店街に高校生を増やそう!～」
3班	「リピーターをつかめ!～長田観光都市計画～」
4班	「長田の衛生状況について～長田ピッカピカ計画～」
5班	「異文化交流と多文化共生」
6班	「高校生の高校生による高校生のための長田改革」
7班	「商店街活性化プロジェクト～年齢を超えて地域をつなげよう!～」
8班	「長田の食文化を活性化させよう!～アボっかけ～」

2) 生徒による地域課題解決策の実践例

生徒の中からは、自分たちで考えた解決策を、実際に実践した班がいくつも生まれています。ここでは、特徴的な3つの事例について紹介します。

地域の方の協力を得て「高校生鉄人化まつり」を一から企画

2010年度に「まつりから学ぶ長田」をテーマに共同研究を進めた生徒たちが「高校生鉄人化まつり」を企画し、運営の中心を担いました。長田区内の高校生による舞台発表や展示、地域の方々と生徒が合同で出店する屋台などが盛り込まれたお祭りを、生徒たちが一から作り上げました。

この企画の生まれる契機となったのは、フィールドワークや地域活動への参加でした。長田区内で行われている祭りの実行委員会に参画し、当日の運

(表3) 生徒が自主的に企画・参加した地域活動(例)

年度	活動内容
2010	若者を商店街に呼び込むため、商店街のオリジナルソングを作りイベントで披露
2011	高齢者と高校生の交流をつくるため、高齢者施設でのコンサートを企画
2012	宮城県石巻市を訪問、仮設住宅において手芸教室の手伝い等に参加 石巻焼きそばについて取材し、石巻焼きそばを販売して収益を寄付
2013	商店街のイベントで地域の名物料理をアレンジした「アボっかけ」販売

## 実践事例紹介：兵庫県立兵庫高等学校「創造基礎」の取り組み



(写真2)「高校生鉄人化まつり」の様子

営スタッフとしても活動していた生徒たちは、祭りをより良いものするためにアンケートを実施します。アンケート結果を長田区役所のまちづくり課に提出し、改善点等を報告した後、アンケート結果を活かして地域を活性化しようと生徒たちが発案したのが「高校生鉄人化まつり」でした。この企画は、「長田の魅力を市内外に発信するイベント案」を募集するための「鉄人のまちづくりイベント企画」において応募者の大人に混じる中で最優秀賞を受賞し、2011年3月に実際に実現しました。

「高校生鉄人化まつり」は総合科学類の後輩たちに引き継がれ、その後毎年実施されるようになりました。

### 大河ドラマ『平清盛』を活用したまちづくり活動への参加

2011年度に「まちづくり WITH KIYOMORI」をテーマに活動した班は、大河ドラマ『平清盛』を活用したま

ちづくり活動を展開する商店街の方々と深く関わる中で、学びを深めていきました。商店街の中に平清盛像を建立することをめざす実行委員会に正式なメンバーの一員として参画し、像の建立に必要な資金を集めるため

に、学校内で募金活動も実施しました。

2012年1月には、生徒達の熱い想いを受け止めた神戸市役所の方のご厚意で、『平清盛』の出演俳優・松山ケンイチさんと深田恭子さんへのインタビューが実現しました。その様子は、地域情報紙の一面に掲載され話題を呼びました。また、2012年6月には「ひらの清盛まつり」において、平清盛像の除幕式前日のお祭りの企画・運営も担いました。

### 高齢者施設でのコンサート企画

2011年度に「少子高齢化」について研究した班は、区の高齢者施設でのコンサートや楽器体験を企画しました。区内の高齢者施設が抱えていた、「高齢者と中高生が交流する機会がほとんどない」と

いう課題に着目した生徒たちは、高校生が出演する施設内コンサートを立案します。社会福祉協議会や施設職員との打ち合わせを重ね、兵庫高等学校の弦楽部やギターアンサンブル部にも協力してもらい、企画を実現させました。利用者からは大変好評だったようで、生徒たちは今後も企画を継続させようという意欲を見せ、2012年度には2回目のコンサートが実施されました。

### 3) 成果と今後の展望

このように、「創造基礎」を受講した生徒たちは、次々と地域課題解決の担い手として活動しています。授業のコーディネートを中心となって担当大前先生に、授業の成果や今後の展望について伺いました。

### 地域や社会への関心の高まり

生徒たちの意識面での変化について、「生徒たちが地域や社会に関心を持つようになったと感じます。自分たちの研究テーマに沿った地域での様々



(写真3) ビオトープの整備活動の様子

な活動に積極的に参加しています。」と大前先生。最近では地域から学校へのボランティア募集依頼も増えており、フィールドワーク先の団体や地域から声がかかった際には、多くの生徒が積極的に足を運ぶ場面も見られるそうです。また、授業期間を終えても商店街のイベントや地域のもちつきに参加したり、1年生の班が取り組むビオトープの整備活動に、かつて創造基礎を受講していた上級生が合流したりするといった動きも見られます。

### 多様な大人から意見を聞き、伝える中で生まれる学び

加えて「地域に出て多様な大人と関わる経験が『他者に思いを伝える力』の習得につながると思います。」と、生徒たちのスキル面の成長についても触れられています。生徒たちは地域課題の解決策を探るために様々な活動に取り組む中で、多様な大人と出会うこととなります。自身が練った課題解決のアイデアを地域の人たちに発表する経験や、企画を実現していくために様々な大人に思いを伝えていく経験が、市民社会の担い手として必要となるコミュニケーション力の育成につながっていくのでしょう。

### 現在の取り組みと今後の展開

「創造基礎」の取り組みは、2013年度に文部科学省「中・高校生の社会参画に係る実践力育成のための調査研

究事業」の指定を受け、生徒の主権者意識を涵養し社会参画の力を育成するためのプログラムを開発するという役割も加わりました。「地方自治・地域の抱える現状と課題」や「民主主義と政治参加」といった「現代社会」で扱われる内容を学びながら、より学びを深めるために参議院議員模擬選挙の実践などにも取り組んでいます。本文中でも紹介した地域課題に関する実践的な研究活動に加え、自立した主権者としての力を育む実践にも取り組んでいます。

2014年度には「創造基礎」が5年目を迎えると同時に、「総合科学類型」が「未来創造コース」へと改編されます。こうした流れの中で次年度も実施される「創造基礎」の展望についてお話を伺いました。

「コース全体としては、社会科学・自然科学を主体的に学ぶ授業内容をさらに充実させる予定です。『創造基礎』を受講した生徒たちは、地域の方々の支えもあって大きな成長を遂げたと思っています。授業の基本的な枠組みは維持しながら継続し、よりよい授業内容になるよう検討を重ねていきたいと考えています」(大前先生)。

### おわりに

地域関係者と連携しながら、生徒が地域課題について調べ学習を行う実践は、シティズンシップ教育の側面からも注目されています。「創造基礎」

での取り組みは、そこから更に一步踏み出し、課題解決のために生徒が主体的に地域に関わっていく実践的な学習プログラムとなっています。地域課題の解決に向けて探究する経験を通して高校生の社会参画の力を育てている「創造基礎」の展開に、今後も注目していきたいと思います。

大前 吉史 プロフィール

兵庫県立兵庫高等学校教諭。民間企業、香川県の高校等での勤務を経て1994年に兵庫県高教員に採用される。2003年度に兵庫高等学校に赴任。2010年に設置された「総合科学類型」必修の学校設定科目「創造基礎」を担当し、2013年度現在もコーディネーターに関わっている。前任校でも地域と連携した授業やインターンシップを行うなど、一貫して社会を支えていく市民を育てるための教育実践を重ねている。教科は地歴公民科。

(yomae2000@yahoo.co.jp)

### 参考文献

- ◇ 兵庫高等学校 (2011) 「未来は“わたし”がつくる～ vision our future, design my future ～兵庫高校のキャリア教育と総合科学類型の取り組み (インスパイア事業)」
- ◇ 兵庫高等学校 (2012) 「未来は“わたし”がつくる～ vision our future, design my future ～平成23年度 キャリア教育と総合科学類型の取り組み」
- ◇ 兵庫高等学校 (2013) 「未来は“わたし”がつくる～ vision our future, design my future ～平成24年度 キャリア教育と総合科学類型の取り組み」
- ◇ シチズンシップ共育企画 (2013) 「教育協働のススメ～学校×地域でよりよい学びを実現するために～」

(鈴木 陵)

## 「社会を変えるには」

小熊 英二 著

社会は変わるのか変わらないのか、変えられるのか変えられないのか、このことを日本の若者はどのように考えているのか。日米中韓の4カ国青少年意識調査では、「自分の参加で、変えてほしい社会を少しは変えられると思うか」という問いに対して、「そう思う」と答えた日本の中・高生の割合は4カ国中最低で31%であった。ちなみに他の3カ国はすべて60%を超えていた（財団法人日本青少年研究所、「中学生・高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較」2009）。この結果と、昨今低投票率が代名詞ともなっている若者の投票行動の間には、大きな相関関係があるように思われる。

その社会の「変わらなさ」の根源は、多くの識者が言うような「日米安保一極集中」モデル（内田樹『この国はどこで間違えたのか』徳間書店、2012）なのだろうか。しかしそれではあまりに話が大きすぎて、とても社会は変えられそうにない。そんなことを考えながら本書を手を取った。本書の構成は以下の通り。

はじめに

- 第1章 日本社会はいまどこにいるのか
- 第2章 社会運動の変遷
- 第3章 戦後日本社会運動
- 第4章 民主主義とは
- 第5章 近代自由民主主義とその限界
- 第6章 異なるあり方への思索
- 第7章 社会を変えるには  
おわりに

社会を変えるには、まず日本社会の立ち位置を明らかにする必要がある。著者は第1章でこの問題に取り組む。そこでの著者の分析は、1990年代後半以後、日本は「ポスト工業化社会」にあり、昭和の日本に築かれた日本型工業化社会の仕組みはすでに限界にきているというものだ。工業化社会においては産業の中心が第2次産業から第3次産業へと移るにともなって、自由度や多様性が増す一方で社会の流動性や不安定さは増大する。その社会は、消費者である分には居心地のいい社会だが、生産者や労働者にとっては、賃下げや非正規雇用への切り替えに怯えなければならない辛い社会だ。

続いて著者は視点を変え、第2、3章では社会を変える動きに注目する。日本より

一足先、1960年代にポスト工業化社会に入った欧米では、1970年前後から社会運動の主体としての労働者や若者、女性労働者といった階級やカテゴリーの意味が失われていった。このことを踏まえて著者は、戦後の社会運動を学生運動から反原発運動への流れと位置づける。そして、2010年代になってようやく1980年代のドイツと社会条件が似通ってきたと分析する。ではそのような状況の中で、どうすれば日本は変えられるのか。

第4、5章で著者は、民主主義の歴史を紐解くことからそのヒントを見つけようとする。そこで著者が問おうとすることの一つは、民主主義を構造的に下支えする主体としての「われわれ」の意味である。またそこでの結論は、ポスト工業化社会では、社会や政治の不安定化の中で、既存の社会には「居場所がない」「代表されていない」と不満を抱く人が増えていくというものである。

では、このようにかくも不安定なポスト工業化社会にどのように対処することができるのか。第6章「異なるあり方への思索」で著者は次のように言い切る。

「『私は社会と関係ありません』とか、『私が動いても社会は変わらない』というのは、悲観でも楽観でもなく、単に不可能です。自分が存在して、歩いたり働いたり話したりすれば、関係に影響を及ぼし、社会を変えてしまいます。政治に無関心な人、不満があっても動こうとしない人が増えれば、確実に社会を変えます。」(p.368) また、次のようにも言う。

「再帰性が増大した社会の問題も、内面的に対処するしかない。具体的には、対話（問答法、弁証法）の促進です。もう従来の『われわれ』に、そのままのかたちで頼ることはできない。ならば、対話を通しておたがい変化し、新しい『われわれ』を作るしかないのです。」(p.397)

なるほど、話としてはわかる。しかし、そもそも相手が対話に乗ってこなかったらどうするのか。著者は続ける。

「それを変えるためには、対話主体を元気づける、力をつけるしかありません。いわばエンパワーメントし、アク

社会を変えるには  
小熊英二どうということなのか。  
どうすればいいのか。

講談社現代新書 2168

全 517 頁, ISBN : 978-4-06-288168-5

ティブ化しなければならない。それを助けるのが、政府なり専門家のやるべき新しい役割だということになる。」(p.399) と。

ここまで読んで、結局はアタリマエの着地点に落ち着くしかないのだろうか、やや意気消沈しながら最終章「社会を変えるには」に向かう。著者は言う。

「ポスト工業化社会へ移行し、再帰性が増大した社会では、『ないがしろにされている』『居場所がない』『代表されていない』という感覚があらゆる人々につのる。」(p.433) 「となると、私の思いつく限りでは、答えは一つしかないようです。みんなが共通して抱いている、『自分はないがしろにされている』という感覚を足場に、動きをおこす。そこから対話と参加をうながし、社会構造を変え、『われわれ』を作る動きにつなげていくことです。」(p.440)

「自分はないがしろにされている」という感覚から始めることは、自分自身を取り戻すことに他ならない。ここまできて、ようやく著者の言いたいことがわかってきた。「おわりに」で著者は言う。

「『デモをやった何がかわるのか』という問いに、『デモができる社会が作れる』と答えた人がいましたが、それはある意味で至言です。『対話をして何がかわるのか』といえば、対話ができる社会、対話ができる関係が作れます。『参加して何がかわるのか』といえば、参加できる社会、参加できる自分が生まれます。」(p.516)

つまり、参加することによって、自分と社会との関係を変えようというわけである。「社会は変わるのか変わらないのか」をいくら自問自答していても始まらない。そのような問いの立て方そのものをやめて、社会に向かってとにかく一歩前へ出てみよう。そうすれば必ず自分と社会の関係は変わるのだ。そういうことが言いたいのだとわかって、全体がストンと腑に落ちた。

水山光春 (mizuyama@kyokyo-u.ac.jp)

# シティズンシップ教育を進める上で 何を大切にすべきか？

## ○ 「無知な市民」の可能性

### 1 「良き市民」の陥穽

シティズンシップ教育を進めていく上で、今日きわめて重要な論点となっているのは、それが、既存の国家や社会にとって都合のいい「品行方正な良き市民」をめざすものとどまるのか、それとも、既存の国家や社会に批判的に関わる政治的リテラシーを備えた「能動的な市民」をめざすのかという点である。たとえば、イギリスでシティズンシップ教育を主導した政治学者のバーナード・クリックによれば、シティズンシップ教育はともすれば「良き市民」の育成にとどまり「ボランティア活動一辺倒」になりがちであるが、それでは「単なる使い捨ての要員」を育てるだけになってしまうという。そしてそのような「使い捨ての要員」ではなく、「政治文化の変革を担う積極的な市民（アクティブ・シティズン）」の育成をこそ、シティズンシップ教育の中心に位置づけるべきであると主張する。そのためには、「政治的リテラシー」（政治的判断力や批判能力）を中心とする政治教育が必要であると、クリックは主張する（Crick 2002:113-115 = 2004:197-200）。

つまりここでクリックは、「良き市民」の育成にとどまるシティズンシップ教育が既存の国家や社会にとって都合のいい「使い捨ての要員」の育成に陥ることを危惧し、そうならないための条件として、政治的リテラシーを備えた能動的市民の教育を強調する。そしてこの政治的リテラシーの教育において中心的な要素となるのが、論争的な課題を学校教育で教えることである（小玉 2008）。

### 2 論争的課題の教育

日本でも、このクリックらの提起をふまえて、論争的な課題の教育をシティズンシップ教育に導入する試みが、例えば未成年模擬選挙や価値判断と意思決定を行う授業を含め、広がりつつある。

特に、2011年3月11日の東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故以降、多くの専門家の、原発事故の原因や状況、また、放射線被曝の影響についての発言は必ずしも市民から信頼されておらず、その結果消費者、生産者の双方が不安と負担に悩まされてきた。そしてここで生じた科学や専門家への不信や不安と向き合うためには、専門家の間でも論争があることを隠さずし市民の側の政治的判断力（政治的リテラシー）を高め、判断を専門家任せにしないような、論争的課題を中心に位置づける教育を行わなければならないことが、教育実践の現場でも痛感されつつある。

ここで重要なのは、シティズンシップ教育におけるシティズン、すなわち市民という概念に、非専門家であるアマチュアという意味が含まれている点である。英米では近年、このような非専門家としてのシティズンシップ（市民性）教育の立場から、市民科学（Civic Science）という視点を基軸に据えたシティズンシップ教育の提案がなされている。そこでは、科学は専門家に独占される知としてではなく、専門家ではないアマチュアである市民の知である市民科学（Civic Science）として捉えられる。

たとえば、アメリカのシティズンシップ教育提唱者、ハリー・ボイトら



東京大学大学院教育学研究科  
教授 小玉 重夫

は、以下のような指摘をしている。

市民科学が示唆するのは、民主主義社会における科学、専門的知識、市民の間の関係の組みかえである。すなわち、市民科学では、市民や公衆が、科学と政治の接点（インターフェース）を左右する鍵を握る。科学と政治の接点とはもはや、科学的専門家と政策立案者のみによって排他的に占められる領域ではなくなる（John Spencer, Harry Boyte, and Scott Peters 2012）。

このように、市民科学では、科学と政治の接点（インターフェース）が重要視される。この科学と政治の接点（インターフェース）は、科学的専門家と政策立案者のみに独占される領域ではない。むしろ、非専門家であるアマチュアとしての市民が鍵を握る領域としてとらえられる。そして、市民がそのような存在になるために政治的判断力（政治的リテラシー）を養成するシティズンシップ教育が位置づけられている。

そして、このような科学と政治の接点（インターフェース）においては、原発や放射線の問題にも端的に示されているように、科学の最先端においても未だ解明されていない、あるいは専門家の間で意見が分かれている、未知の領域や無知の領域が存在している。アマチュアである市民に求められるの



は、このような未知の領域、無知の領域があることを自覚し、自分が無知であることを自覚的に受け入れられるようなあり方である(小玉 2013)。

### 3 「あまちゃん」に見る

#### アマチュアリズム

自分が無知であることを自覚的に受け入れられるような市民のあり方を考える際のがかりとして、一つの例を挙げてみたい。

今年度の上半期に放映されたNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」(宮藤官九郎作)は、学校でいじめられ、引きこもっていた東京の高校生(天野アキ)が、母親の実家がある岩手県の北三陸地方につれられていき、そこで地元の町おこしに目覚めるところから話が始まる。その後、東京の芸能プロダクションでもまれ、東日本大震災を経て、アキは、親友や先輩、家族、地元の人たちと共に、津波で流された「あまカフェ」の再建に立ち上がり、海女として、そして地元アイドルとして活躍していく。

原作者の宮藤官九郎は、この作品のモチーフについて、次のように述べている。

元々が「地元アイドルが町おこしをしていく」というアイデアから出発している。『あまちゃん』っていうタイトルは、「海女」はもちろんだけど「アマチュア」の意味もあって、アキが大都会や芸能界という「海」でどう成長していくかの話なんです。(宮

藤 2013:60)

ドラマの終盤では、こうしたドラマモチーフの核心にふれるセリフがでてくる。

アキ：芸能界さいると、っていうか東京がそうなのかな、成長しねえと愈けてるみてえに言われるべ。でもな「成長しなきゃ駄目なのか」って思うんだ。人間だもの、ほっといても成長するべ。・・・それでも変わらねえ、変わりたくない部分もあると思うんだ。あまちゃんだって言われるかもしねえけど、それでもいい。・・・うん、プロちゃんにはなれねえし。なりだぐねえ。(「あまちゃん」第147回、2013年9月18日放映より)。

太巻(東京の芸能プロダクションの社長)が再建された「あまカフェ」を見て：プロでもない、素人でもない、アマチュアのなせるわざ、まさに、あまカフェだ。(「あまちゃん」第151回、9月23日放映より)。

この作品でアマチュアリズムがうたわれているのは、プロとして一人前になる、完成されるということがめざされていないところに一つの理由がある。主人公のアキや、アキをとりまく親友や先輩は、みな、それぞれに自分の職業の夢に挫折を経験し、ある意味中途半端な人生を送っている。しかし、そのことを否定的にとらえるのではなく、むしろ肯定的に受け入れつつ、無知な「あまちゃん」であること、アマチュアリズムのおもしろさを楽しみ、「町おこし」という政治に能動的に参

加する。そこには、プロでもない、素人でもない、その間の存在、成長を追い求めない無知な市民の可能性が示唆されているように思う。

### 4 「良き市民」から「無知な市民」へ

ルクセンブルクの教育哲学者、ガート・ビエスタは、既存の社会に適応する「良き市民」への対抗案として、「無知な市民(ignorant citizen)」という概念を提唱し、以下のように述べる。

無知な市民とは、自分になるべき良き市民像が何であるかについて無知であるような人のことである。無知な市民は、ある意味において、良き市民についての知識を拒絶し、社会に適応することを拒絶し、既定の市民的アイデンティティに縛られることを拒絶する。しかしこのことは、無知な市民が単なる「逸脱者」であることを意味しない。・・・(中略)・・・市民としての学びは、知識やスキル、能力や態度の獲得をめざすのではなく、民主主義の実験に絶えずさらされ、関与することをめざすからである。(Biesta 2011:152)

答えが一つに定まっていない無知の領域を自覚しつつ、そこでの「民主主義の実験に絶えずさらされ、関与することをめざす」教育こそが、論争的な課題をシティズンシップ教育に位置づける際の条件となる。「あまちゃん」とビエスタの例はこのことを示唆している。

小玉 重夫 (skodama@p.u-tokyo.ac.jp)

#### 参考文献

- ◇ Gert Biesta 2011 “The Ignorant Citizen: Mouffe, Rancière, and the Subject of Democratic Education”, *Studies in Philosophy and Education*, March 2011, Volume 30, Issue 2
- ◇ Bernard Crick 2002 *Democracy*, Oxford University Press, (= 2004, 添谷育志・金田耕一訳『デモクラシー』岩波書店)。
- ◇ 小玉重夫 2008 「バーナード・クリックとイギリスのシティズンシップ教育」特定非営利活動法人 Rights ほかに編『18歳が政治を変える！～ユー
- ス・デモクラシーとポリティカル・リテラシーの構築～』現代人文社
- ◇ 小玉重夫 2013 『学力幻想』ちくま新書
- ◇ 宮藤官九郎 2013 「『あまちゃん』23の疑問に答える！」『週刊文春』第55巻第32号
- ◇ John Spencer, Harry Boyte, and Scott Peters 2012 “Civic Science”, *Newsletter of the American Commonwealth Partnership*, August, 2012 Issue #6

## ○ シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？

当たり前のことだが、「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか」は、求めるシティズンシップ像がいかなるものかによって変わってくる。私が念頭に置いているのは、社会経済文化的な差異が顕在化する現代社会において、福祉国家が後退し新自由主義が勢力を拡大するなかを、①生き抜いていく力であり、②多様な生き方を保障する社会づくりに参画する力である。河野（2011）は、「主権者教育」を提唱するなかで、「これまで公共の場で己の真剣なニーズを語る機会を与えられてこなかった人々を議論の場へと迎え入れ、その人たちに語りしめ、そこに、平等性と公平性に関する社会的な不備を聞き取ったならば、主権者としての権限を用いて社会改良を試みる。これが主権者の道徳的義務であろう」（136頁）と述べている。このことが含意するのは、シティズンシップ教育は、公共の問題を扱うことが多いかもしれないが、その源泉は多様な人々の私的な生き方にあるということである。さらに、多様性とは、社会経済文化的に少数派である人々の生き方に敏感になるということである。そのために大切にすべきことを実践の観点から述べたいと思う。

### 自己、他者、ものごとへの基本的な信頼

シティズンシップ教育に限らないことではあるが、自己、他者、ものごとへの基本的な信頼を育むことは教育の前提として不可欠であろう。自分や他者、さらにはより広い社会に対して肯定的な感情を持たなければ、人や社会のことを考えたりはしないだろう。

大阪府北部にある萱野小学校では、

すべての教育活動を通じて、互いの思いや考えを伝え合うことを通して、自分自身を見つめ、ものの見方や自己の世界を豊かにしていくことがねらわれている。低学年の段階から、クラスの仲間や教師、保護者・地域住民とのつながりから、自分や友だちの思いや「いいところ」と自他の違いに気付き、自己肯定感を養う。これを萱野小では「あたたためあう関係」と呼び重要視している。お互いが自分の生活や「思い」を話したり聞いたり、各教科等の授業のなかで書いたものに対して「コメントカード」のやりとりをしたりする。互いに「いいところ」を見つけて評価しあう経験を重ねるなかで、自他に対する肯定的な見方がはぐくまれる。自分の、他人の、ものごとのいいところは、見ようとしなければ見ることができない。取り組みを通じて、いいところを見つける「習慣」がはぐくまれているのである。

あたたためあう関係には、上述のような互いの「思い」を受け止め認め合うといった「情」的な面と、自分とは異なる視点や考え方・感じ方を提示してくれるという「知」に関わる側面がある。子ども一人の経験からは生まれてこない考え方や感じ方を友だちや大人のコメントは提供してくれる。子どもたちは複数の目を自らの中に住まわせることができ、人や社会を見る力を広げているといえるだろう。伝えあい、あたたためあう関係のなかで、子どもたちは自分の経験を深めてくれる他者（友だち、教師、地域住民等）と出会う。子どもが学ぶということは、それまでの子どもの経験からは生まれてこない新しい経験を積み上げるということである。



関西大学文学部  
准教授 若槻 健

あり、そしてその新しい経験は、自分の外からやってくる。子どもたちは他者の目を通して自己を見出す。自己は半ば他者によって形作られるのである。人間関係を大切にすることによって、単純に「みんな仲良くしましょう（しなければならぬ）」といった教育ではなく、むしろ自他の違いと共同性に気付くなかで成長していくことが大切にされている。

こうした、自他や社会への愛着を育む教育はしばしばボランティア活動などアクティブなシティズンシップ教育にもつながっていく。佐賀市の提唱する「市民性をはぐくむ教育」では、地域や学校の活動のなかに子どもたちの「出番」と「役割」を与え、大人がそれを支え、やりきったことに対してきちんとほめて育てる（「承認」）ことが大切であるとされている。身近な行事に、大人も子どもも参加することで、地域の一員であるという所属意識が芽生えたり、自分も必要とされているということが実感できたりする。そして活動の中で、さらに地域やその活動を良くしていこうと、周りの人々と助け合いながら取り組んでいく。このような営みを繰り返していくことで「市民性」が育まれていくという。同様に、和歌山県でも「人や社会とのつながりを大切にしながら、地域社会の一員と

して、よりよい地域づくりに積極的に参加できる資質や態度」を育む市民性教育に取り組んでいる。

### 多様性の確保

人間関係づくりや地域活動への参加は、子どもたちの自尊感情や自主性を高めたり、コミュニティへの愛着を育むものとして評価することができるだろう。その一方で、こうした取り組みは、しばしば所与の社会への適応や貢献を強調し、人々の多様性を見えなくする。その場合、社会の矛盾や不公正に対する批判的な思考は養われず、助け合いの精神だけが涵養されることにもなりかねない。

それでも地域活動への参加は、人々の多様な生き方に会えるチャンスでもある。先の萱野小学校では、こうした出会いをとっても大切にしている。地域をよりよくするために真剣に取り組んできた人、社会のなかで差別を受けながらも強く生きてきた人、様々な悩みを抱えながら学校に通うクラスメイト等々具体的な「思い」を持った人に出会っている。それは「マイノリティ」と呼ばれる人々や、かれらとつながり社会活動を行っている人々であることも多い。その「思い」とは、厳しい社会の現実のなかで強く生き、また社会をよりよくしていこうという気持ちである。

子どもたちは、「さまざまな出会いや教材、活動を通じて受け取ったり実感したりした思いを、自分の生き方につなぐ」取り組みを積み重ねてきた。そうすることで、地域住民の多様な思いや境遇に思いを重ね、皆が輝ける地域づくりへと目を向けるようになって

いった。出会った人々の「思い」を受けとめ共感を深め、皆で考える問題として引き受ける。それは、社会の周辺にいる人々の声を私的領域（個々人が対処する問題）から公的領域での議論に開くことでもある。子どもたちは、社会問題を抽象的な議論として論じるのではなく、具体的な「思い」を持った人への共感から自分たちが論じるべき問題として受け止めるのである。このことが社会参加を教師や大人から「やらされている活動」でも「かわいそうな人のためにやってあげる活動」でもなく「自分たちの活動」にしているのであり、時に私的な思いやりネットワークとしてのボランティア活動を超え、社会のあり方自体を問い直し、新たな価値を生み出す契機にもなる。

### 思いをかたちにする

兵庫県の舞子高校は、全国唯一の「環境防災科」があることで知られる学校である。東日本大震災に際して、生徒たちは被災地で「泥かき」を行ったり、県内の農業高校などで育てられた花を届ける活動などを行うなど、被災地支援のボランティア活動に積極的に取り組んできた。地域貢献色の強い取り組みであるが、舞子高校の教育課程の要はそれだけではない。防災を社会問題として理解するために次の4つのキーワードが用意されている。

「ハザード」は、地学を中心に自然現象としての災害を理解する。「災害対応」では、避難・救出・支援といった現実的なノウハウを学ぶ。「社会背景」では、災害の背景には脆弱な防災力しかない経済的に不利な立場の人々がいることを学ぶ。そして、これら3



要素を包み込むものとして、「語り継ぎ」がある。生徒たちは、被災経験者の経験や思い・願いを聞き取り、引き受けていく。「ハザード」、「災害対応」、「社会背景」が知識やスキルを高めるものであろうとするならば、「語り継ぎ」はその知識やスキルに命を吹き込むものである。この4つのキーワードでめざされるのは、「サバイバーとなる教育」「サポーターとなる教育」「市民力を育む教育」だという。それは、災害が起きた際に、自分が生き残るための備えや知識を学び、災害時や復興期に被災者といかにつながりあっているのかを学び、災害に強い社会づくりを担う知識・スキル・意識を高めるシティズンシップ教育である。

思いは、知識やスキル、批判的な思考と結びつかなければ公的な問題として扱われることはないし、ボランティア活動も自己満足の活動にもなりかねない。逆に知識やスキル、批判的思考が思いと結びついていなければ、社会問題は他人ごとには過ぎず、真に学び取り組むべき課題にはならない。両者の関係をうまく結ぶことが、言い換えれば、思いをかたちにする力を育むしかけが実践において求められるのだと思う。

若槻 健 (w-ken@kansai-u.ac.jp)

参考文献

◇ 河野哲也 2011 『道徳を問い直す リベラリズムと教育のゆくえ』 ちくま新書

【活動報告】 J-CEF クロストーク vol.1 参院選の総括から「若者の政治参加」を考える 2013.9.15

衆議院が解散されない限り、次の大型国政選挙は3年後。この3年間にシティズンシップ教育に関わる私たちは何をすべきか。今回のクロストークでは、「若者の政治参加」に絞って、現在の諸取組の到達点と課題からこの間に関する議論を深めました。ゲストの原田謙介さん（NPO 法人 YouthCreate 代表）と林大介さん（模擬選挙推進ネットワーク事務局長・東洋大学助教）のお二人からは「身近な生活」について争点となる地方選挙



や日常的な議会活動等を主権者であると感じられる機会としてどう活用するかという投げかけがあり、また山崎武昭さん（模擬選挙推進ネットワーク代表）と原田さんからは ICT 活用等による従来の手法の刷新が提案されました。全体討論では、模擬選挙のバージョンアップや選挙文化の変革、ボランティア活動層の政治参加促進など、幾つかの論点が示され、参加者がそれぞれの現場に合う形で「宿題」を持ち帰る形となりました。

【イベント情報】「シティズンシップ教育ミーティング」のご案内 2014.3.15～16

このたび、シティズンシップ教育に携わる方々や関心のある方々の交流や意見交換の機会として、「シティズンシップ教育ミーティング」を開催する運びとなりました。

詳細につきましては、後日改めてご案内致します。

テーマ：「シティズンシップを育むとは？」

日時：2014年3月15日(土)13:00～16日(日)16:30

(時間は変更となる場合がございます。)

場所：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館・12号館

定員：100名(予定)

参加費：未定

【活動報告】 J-CEF 設立記念シンポジウム「シティズンシップ教育が拓く未来とは？」 2013.3.17



シティズンシップ教育実践の広がりや深化を目指して、日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）の設立記念シンポジウム「シティズンシップ教育が拓く未来とは？」を開催しました。当日は学校教員、教育に携わる NPO、大学関係者、学生ら 150 名を超す参加者を迎え、様々な立場からシティズンシップ教育実践の状況を報告し、これからのシティズンシップ教育の展望について議論しました。（詳細は <http://jcef.jp/project/networkmeeting/>）

主催／日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）設立準備会

共催／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科、立教大学社会デザイン研究所

【事務局より】

● WEB ページリニューアル

WEB ページをリニューアルしました。 <http://jcef.jp/> 会員募集中！ WEB ページから入会できます。入会特典：「ニュースレターを無料でお届け」「会員用メーリングリストに登録」「主催セミナー等への会員価格での参加」

● ニュースレター vol.1 刊行

毎年春号・夏号・秋号・冬号を発行し、会員のみなさまへシティズンシップ教育や J-CEF に関わる情報をお伝えいたします。

● ボランティア募集

J-CEF では、ともに動きをつくりだす仲間としてボランティアの募集も随時行っております。お気軽にお問い合わせください。担当：鈴木 Tel：070-6506-0369 E-mail：info@jcef.jp

J-CEF NEWS

no.1

2013 AUTUMN

発行

2013年11月

編集

日本シティズンシップ教育フォーラム(J-CEF)

〒661-0965

兵庫県尼崎市次屋 1-2-20

ハイツアメニティ 2-203

tel.070-6506-0369 e-mail info@jcef.jp

定価

会員無料